

「会員の力」をクラブに活かす10のヒント

先に紹介した山口県、熊本県の2事例をふまえ、その他の事例(文末 URL 参照)、市民参加・ボランティア関連の文献・資料情報を加えて、「会員の力」をクラブの運営や活動に活かすヒントを10のポイントにまとめて紹介します。以下はヒントの一部ですので、個々のクラブの実情に照らし合わせて参考にしてください。

1. まず、クラブ自身をよく知ってもらおう！

実は会員が「クラブ自身」をよく知らず、クラブに対して心理的な距離感を持っているケースは少なくありません。「設立までの経緯」「理念・ビジョン」「活動の実績(歴史)と現在」「収支状況」「会員や外部からの評価」「課題と将来展望」などの情報をコンパクトにまとめ、時間をかけてでも全会員で共有するようにしましょう。

これらのクラブ情報は、ホームページ・会報紙での公開はもちろん、入会時や総会などでの対面説明が効果的です。ただし、地域の共有財産として一緒にクラブを創っていくためにも、クラブの過去にこだわり過ぎず、新しい会員の新しい風を歓迎しましょう。

2. クラブは「会員で創る」という前提を！

事例にあったように、山口県のコミュニティクラブ東亜(以下、東亜)では、「みんなで創る、みんなで支える」を合言葉に、会員の「お客様意識」を払拭していました。熊本県の花園スポーツクラブ(以下、花園SC)では、「会員はクラブの運営委員」として、一緒にクラブを運営していくスタッフであることを明確に位置付けて会員に伝えていました。両クラブとも、実際に、会員が主体的にやりたいことを考え、会員の要望を基にプログラムを設定し、特に花園SCではさらに会員が指導者探しも行っていました。

このように、クラブは「会員で創る」という前提を始めからしっかり理解してもらい、何らかの協力を得られるように常に会員に働きかけていくことが重要です。

3. リーダーは率先して行動しよう！

花園SCの会長は、自ら一軒一軒に広報誌を配っていました。2年経て会員が自発的に協力してくれるようになり、今では各地区を手分けして配っています。

必ずしも会長だけに限りませんが、立場のある人や意識の高い人達がクラブや地域のために率先して行動する場合、その影響力は大きく、会員を「私達も何かしなくていいのかな」という気持ちにさせます。

また、花園SCの広報誌を配る会員の「自分の住む地域の道や人を知らなかったが、広報誌を配って回ることによって道を知り、知り合いも増えてよかった」という感想のように、活動に参加して「気づき」があったり、変化や効果が実感できたりすれば一層の継続にもつながります。

4. 共通目標を周知させよう！

東亜では、クラブの共通目標を明文化していました。「当クラブは『みんなで創るクラブ』で、会員はどなたでも運営に参加できます。『もっと楽しく』『もっといきいきと元気』なクラブに…」と。

「何のために」クラブを創り運営するのか、スポーツ振興や地域づくりなどの理念も重要ですが、人との出会い、生活の質向上など、個人の成長につながる部分も会員に垣間見せることがポイントです。

理念や目標を会員に浸透させるために必要なのは、「周知」です。東亜では、「共通の目標」を各活動場所に掲示し、毎月出している「かわら版（会報紙）」にも必ず掲載し、「みんなで支える」ことについて会員同士で話もしていました。花園ＳＣでは、毎年行っている総会で「クラブ会員はクラブの運営委員」である旨を必ず説明し、新しい会員に確実に周知させています。

5. 一人ひとりの役割を明確にし、引き継ごう！

東亜の会員の多くが事務局当番やお世話人など役割をそれぞれ持っていました。ユニークなのは、2年交代の任期を担当者の中でずらすシステムです。

つまり複数の担当者のうち毎年1、2人が入れ替わるので、新しく加わった会員は、前年度からの担当者に教えてもらいながら携わることができます。現場では「今年は私、来年はあなた」という「お互い様」の意識があり、このような無理のない役割と円滑な交代が、会員の力を有効に引き出す仕組みとして機能しています。

会員の一人ひとりの得意分野や好きなことを活かせる場づくりも併せて考えたいものです。また、家庭や仕事の事情などで役割から離れることも会員間で快く受け入れ、「いつでも戻ってきて」という開かれた雰囲気を保ちましょう。

6. 地域のための共同作業をイベント的にしよう！

上記5は「クラブ内の役割を果たし、クラブの一員として承認を得る」システムですが、公益性のあるクラブの活動では、地域全体を舞台に活躍できる場がたくさんあります。

例えば校庭の芝生化や草刈り、ゴミ拾い等清掃活動、植栽などで、簡単な作業ですが多人数が必要になります。そこでクラブが音頭をとり会員を中心に共同作業をすると、1人ではできないことが皆の力で可能になったり、目に見えて形になったりすると、「一体感」を感じることができます。このような「一体感」や、その結果「人の役に立った」という実感こそが、会員の行動の動機付けになります。

会員が地域の課題解決に積極的にかかわれるよう、クラブが場を設定し、楽しく参加できる演出（例：揃いのＴシャツ、終了後の懇親会等お楽しみ、イベント的に実施する等）も配慮しましょう。

7. 「クラブの存在価値」をアピールしよう！

クラブの活動が評価されたり信頼を得られたりすれば、「このクラブにかかわっていてよかった」と会員は誇りを感じることができます。

具体的には、新聞やテレビ、行政紙、タウン誌などのメディアなどに取り上げられたり、自治体や学校などから地域に不可欠な存在として認められたりすることもあります。東亜では、大学施設を使えることに対して会員の「恵まれている」という気持ちや、草刈り等の活動を促していました。

評価や信頼をクラブが得るには、日頃からの信頼関係づくりはもちろん、クラブの活動が、地域にどのような効果をもたらしているのか「クラブの存在価値」を客観的に分析して、行政やメディアに発信しアピールすることも重要です。

8. 意思決定に会員の意見を反映させよう！

会員の代表が運営委員会や理事会に出席して、現場のニーズ、改善点や課題などを会議に上げる仕組みは大変重要です。

会員の意見やアイデアが運営に反映されればクラブに対しての帰属意識が高まり、協力しようとする姿勢が生まれます。クラブ内に相談窓口や投書箱なども設置し、会員の意見をこまめに反映させて事業の改善や意思決定をしましょう。

会員はクラブの運営や経営状況をチェックする義務があります。特に総会では、会員として意見を述べ課題解決に向けて真剣に語り合うことで、クラブの一員である自覚と責任が芽生えます。

また、指導者は現場の重要なキーパーソンなので、クラブの方針にそって必要な予算や特典を与えることが指導者、ひいては会員の参加意識を高めることにつながります。

9. 感謝し、ほめ合い、楽しい雰囲気で！

花園SCの会長からは、「会員が自主的に動いてくれ、・・・私は何もしていないのですよ」「会員であり運営委員である協力者や、クラブを思う指導者の方々の熱意、これらはクラブの強みです」と、会員や指導者を立てるコメントがありました。上に立つ立場の人達に厳禁なのは、「やってもらって当然」「自分の手から（自慢）」「自分が正しい（意見に固執）」と思うことです。たとえ自分がやったことでも、常に周りを立てて、ほめて、感謝の気持ちを何度も表すことが、会員の力を引き出す上で大変重要です。

活動の場での楽しい雰囲気づくりも必須です。クラブにかかわっている人達自身が楽しんでいれば、新しい会員も「自分もクラブにかかわりたい」と思うようになるでしょう。

10. 地域で「第三の居場所」になろう！

クラブは、「家庭」や「社会（職場、学校等）」の間にある「地域」という中間領域にあります。会員同士は社会的地位や年齢に関係なく対等な関係であり、ルールを守り、お互いを尊重しながら交流します。例えば、学校の違う子ども達同士が出会い友達になることもできますし、近所のおじさん、おばさんが、近所の子どもの話を聞いたり、叱ったりできる社会教育の場にもなります。

家庭や社会が複雑化する現代社会では、自分の存在が認められ安心して過ごせる時間・空間が求められています。時には「自分の家」の延長のように、時には「社会とつながる、社会を広げる」場として機能する「第三の居場所」にクラブはなりたいものです。自分の居場所だからこそ、クラブに貢献しようと思えるのです。

【メルマガバックナンバー、参考URL】

▼メルマガ 64 号（2011 年 2 月 21 日発行）＜特集＞やめない会員を増やす「帰属意識」

<http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/local/mail/backnumber/64.pdf>

▼メルマガ 57 号（2010 年 7 月 20 日発行）＜特集＞クラブをわかりやすく伝える～住民との共感プロセス

<http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/local/mail/backnumber/57.pdf>

▼メルマガ 55 号（2010 年 5 月 20 日発行）＜特集＞クラブの社会への発信力

<http://www.japan-sports.or.jp/Portals/0/data0/local/mail/backnumber/55.pdf>